

（１）雑草防除の考え方

千葉県の水田の雑草の発生の特徴は主に早期栽培であることにより、千葉県では近隣県の普通期栽培地帯に比べ多年生雑草の発生量が多いことである。これは図 1 に示すように多年生雑草が繁殖器官を形成する 9 月上旬から 10 月上旬には、稲刈りが終わって増殖に適した条件になるためである。したがって、稲刈り後早期の耕うんや秋季防除は繁殖器官の形成量を減らす効果が高く、雑草防除の重要なポイントである。もう一つは普通期栽培に比べ雑草の発生がばらつき、防除が困難な点である。特に多年生雑草に対しては、初期＋中期又は後期の 2～3 回の除草剤の組み合わせ、さらには耕種的な防除法をも組み合わせた総合防除を考える必要がある。以下に主な水田雑草の防除法を示した。

・ 春季防除

主にセリや春雑草を対象とする。水田の代かき前に、雑草が生育を始めたなら、ラウンドアップマックスロードにより防除を行う。

・ 代かきによる繁殖器官の埋没

発生深度が浅いミズガヤツリ、セリや代かき時に既に発生しているコウキヤガラなどは代かきにより繁殖器官や茎葉を土中によく埋没させ、発生を抑える。

・ 田植前後土壌処理剤(初期剤)

雑草の発生前～始めには場に散布して、雑草の発生を抑える剤である。これにより雑草の発生や生育を一時的に抑え、その後の一発処理剤や中期剤を体系処理する。なお、発生草種に応じた適切な除草剤を選ぶことが大切である。

・ 一発処理剤(初期一発処理剤、初中期一発処理剤)

現在の水田用除草剤の主流である。一発処理剤は、体系処理を確立するために開発されたもので、雑草発生が少なく難防除雑草も発生しないといった条件がそろえば、一回の処理で雑草防除が可能である。

・ 茎葉兼土壌処理剤(中期剤)

既に発生している雑草を枯殺するとともに、その後の雑草の発生を抑える剤である。イネが 5 葉期を過ぎてからの散布で安全性が高く、初期剤との体系処理で使用されるのが一般的である。一発処理剤の連年使用で、特定の雑草が残るようになった場合などに有効で、最近見直されている。

・ 茎葉処理剤(中期及び後期剤)

既に発生し生育の進んだ雑草に直接水和剤を茎葉に散布、又は土壌に粒剤を散布し雑草を枯殺する。なお、雑草の発生を抑制する効果はない。

・ 秋季防除

薬剤による秋季防除は水稻の刈取り後に繁殖器官を増やす多年生雑草のマツバイ、ミズガヤツリ、オモダカ、セリ、クログワイに対して有効である。なお、ミズガヤツリ、クログワイ、オモダカには 10 月上旬までに、マツバイ、セリに対しては 11 月上旬までに散布する。

・ 水稻刈取り後早期の耕起

図 2 に示したように繁殖器官の形成初期(9 月中)にロータリ耕で地上部や匍枝を切断することにより、繁殖器官の形成を抑制することができる。

・ 秋冬期の耕起

休眠期の塊茎を冬期の低温や乾燥によって死滅させるために行う。冬期に土壌が乾燥する乾田では効果的であるが湿田では効果が低い。

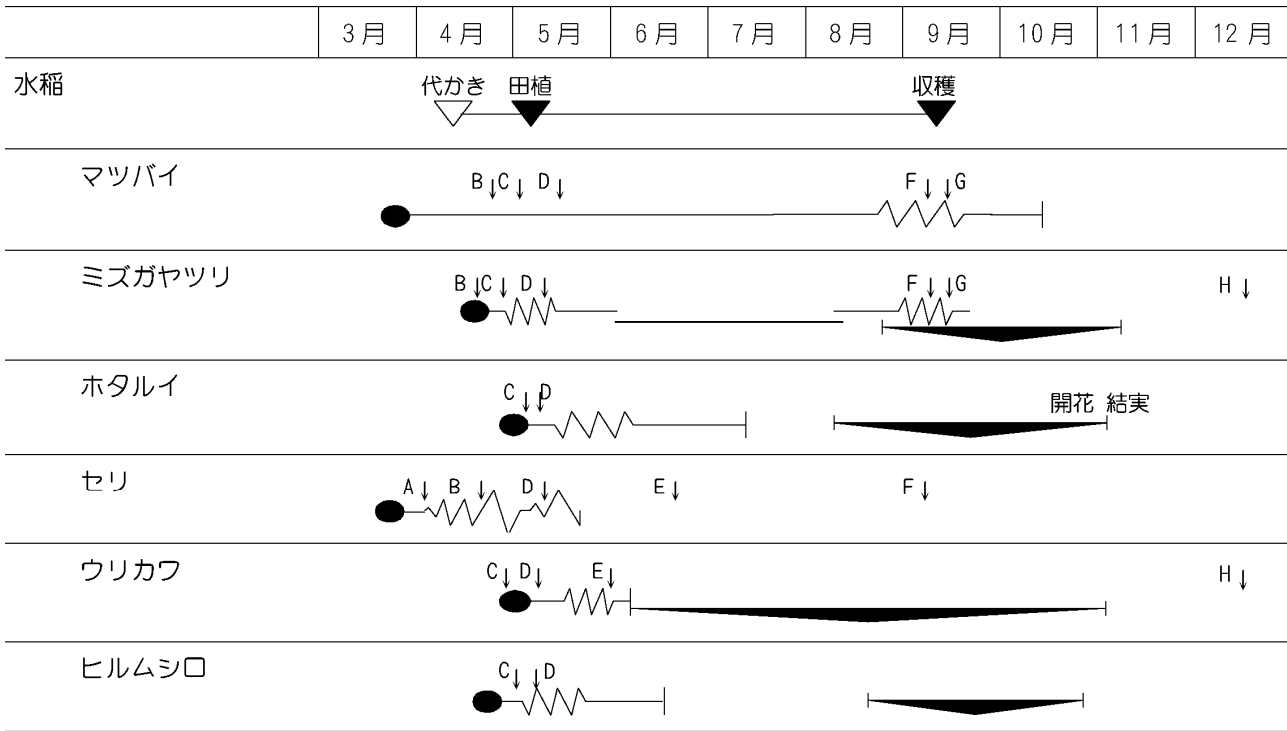


図 1 主要多年生雑草の生活環及び防除方法

- 注 1) 発消長は始期 盛期 終期、塊茎形成は始期 終期で示した。
- 2) 防除は、A 春季防除、B 代かきによる繁殖器官の埋没、C 初期除草剤の散布、D 中期除草剤の散布、E 後期除草剤の散布、F 秋季防除、G 稲刈り後早期の耕起、H 秋・冬期の耕起とした。

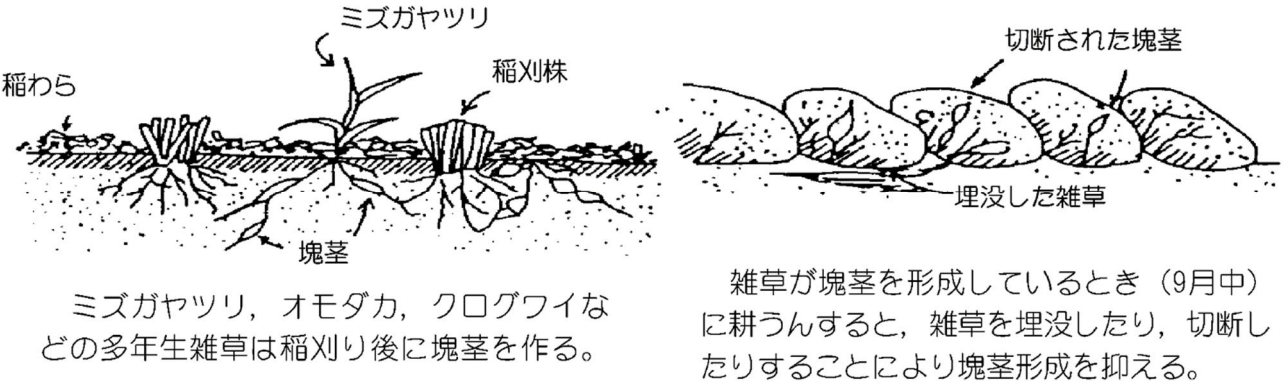


図 2 水稲刈り後早期の耕起

表 1 水田雑草の分類

一年生雑草	広葉雑草	コナギ、アゼナ、キカシグサ、ミズハコベ、アブノメなど
	カヤツリグサ科雑草	アゼガヤツリ、タマガヤツリ、カヤツリグサ、ヒデリコ、コゴメカヤツリなど
	イネ科雑草	タイヌビエ、ケイヌビエ、アゼガヤなど
多年生雑草	広葉雑草	オモダカ、ウリカワ、ミズハコベなど
	カヤツリグサ科雑草	マツバイ、ミズガヤツリ、ホタルイ、クログワイ、コウキヤガラなど
	イネ科雑草	キシュウスズメノヒエ、トダシバ、チゴザサなど
	その他の雑草	ヒルムシロ、デンジソウなど
浮遊性雑草		ウキクサ類、サンショウモ類など
藻類		アオミドロ、アミミドロなど